

# 普遍性の発見とその理論

二 宮 源 兵

## 一、普遍性の問題

推理するに当つて、善惡に関する道徳的判断をするに當つて、芸術の觀賞をするに當つて、或は又、救の道を求めるに當つて、当然行き當る問題は、普遍性の問題である。即ち、吾々が推理するに當つては、個々の事柄若くは觀念を、公理若くは普遍的真理に照らして証明したり説明したりする。何が善であるか、何が惡であるかを判断しようとする時には、何かの普遍的規範に照らして決定しなければならない。ものの美醜も亦同様に、普遍的美の基盤に立つて、判断されるのである。救いを得ようと志す時には、普遍的真理であり普遍的救済の原理である神に帰依しなければならぬ。

「あなたが一つの普遍的法則となることを、直接に意慾し得るような格率に従つてのみ行為せよ」<sup>(1)</sup>。或は、  
「人は、自己の行為の格率が、普遍的法則となる事を意慾する事が出来なければならない」<sup>(2)</sup>。

というカントの言葉は、右の意味をよく説明している。即ち、人が行為を行なう時には、その行為は、誰が、何時行つても善と認められるか否かを反省して、然る後に実行せよというのである。これは、カントが道徳的行為は普遍的法則に従わねばならない事について言つた言葉であるが、論理的推理、芸術的觀賞、宗教的直觀等についても、同じ意味の事がいえる。

哲学史を回顧して見ると、ギリシヤ哲学に於て、「普遍性」について論じた学者が二人ある。一はヘラクレイトス

であり、他はソクラテスである。

衆知のように、ギリシヤ哲学に於ては、紀元前五世紀の後半から、四世紀の初頭にかけて、ソフィストやソクラテスが出現する迄は、思惟の傾向が宇宙論的であり、客観的であつて、宇宙の根源の探究にのみ向けられていた。従つて、此の時代までは、只一つの場合即ちヘラクレイトスの場合を除いては、ものの普遍性、もの自体の究明のような概念的思惟は、ほとんど存在しなかつた。ヘラクレイトスは、ひとり宇宙論者の中にあつて、紀元前六世紀の後半かう五世紀の初頭にかけて、「ロゴス」の哲学を称え、ロゴスは、実に宇宙の普遍的真理である事を強調して、ギリシヤ哲学に深さと広さを与える事に貢献したのであつた。

ソクラテスは、紀元前五世紀の中葉から後半にかけて、ソフィストの相對論によつて荒廃に向いつつあつたギリシヤ哲学を、普遍的真理の存在を主張する事によつて救済したのみならず、それを不朽なものとしたのである。この普遍的真理の存在の主張こそ、人間性に存在する「普遍的概念」を発見する事が哲学の目的であり、人間の完成であることを強調したところのものであつた。

このような意味に於て、ここにヘラクレイトスとソクラテスとの「普遍性」に関する思想を述べて見度いと思う。

## 二、ヘラクレイトスの思想に於ける普遍性

ヘラクレイトス (Herakleitos, 535—475頃 B. C.) が残している百三十の断片、及び真偽不明として伝えられている十余の断片を見ると、彼は、本体論を講じ、或は認識論を論究し、或は靈魂の救済即ち宗教的體驗を語っている。彼が残している思想は、所謂「断片」を通して窺われるものであつて、組織ある哲学体系を明示しているわけはないが、彼の深い且つ暗示に富んだ思想は、将来ギリシヤ哲学の主要問題になつた認識論、本体論的概念論、實在論並に道德的諸問題にふれ、且つヘブライ人の宗教的體驗に類似した問題に論及している。ヘラクレイトスは、実にソク

ラテス以前の哲学者の中異数なものであつて、紀元前約五百四十年に生れ乍ら、尚よく百年後のソクラテスやプラトンの思想を語り、二百年後のストア的倫理を主張して、エピキュラスの倫理を否定し、約五百五十年後のフィロンや、七百五十年後のプロティヌスの思想を暗示している。而も、彼は、自らギリシヤ人であり乍ら、ヘブライ人の宗教的体验即ち唯一にして普遍の實在に統一されている宇宙の觀念を有し、この普遍的統一者と合一することが、眞の解脱であり救である事を教えている。

哲學的思惟をなすものが、その出發点に於てか、若くはその究極的に於てか、必ず想到しなければならない問題は、真理の主觀性と客觀性との問題である。若し、真理なるものが存在するならば、それはものに關する主觀的觀念即ち主觀的判断の形式として存在するのか、若くはそれは客觀的實在性を有するものであるか。真理を主觀的判断の形式であると理解する場合には、真理に關する二つの見解が生ずる事になる。一は、主觀的真理は、全く個々人の意見そのものが直ちに真理であると主張する場合であり、他は、主觀的真理なるものは、万人に普遍妥当する性質のものでなければならぬと主張する場合である。これらの二つの見解は、ソフィストとソクラテスの論争の中心問題であつて、前者はソフィストの相對論の立場であり、後者はソクラテスの普遍論の立場である。

真理は、客觀的に存在するものであると理解する場合には、ここにも亦二つの見解が生ずる事になる。一は、真理はもの自体に存すると理解する場合、他は、真理は客觀的に先驗的に宇宙に存在すると理解する場合である。何れの場合に於ても、客觀的に存在する真理なるものは、普遍性をもつて人間に臨んで来る性質を有しているものでなければならぬ。「二」と云う客觀的數の觀念は、「一」と「一」との和であることを、万人に等しく強制する。この強制を犯かすと、人は誤謬に陥る。神という客觀的存在は、万人が等しく普遍的救の原理として仰がなければならないところのものである。善という客觀的原理は、凡ての人が道德的行為を實踐するに當つて、必ず規範とし又理想としなければならないところのものである。このように、真理は、客觀的であり、先驗的であり、普遍的であると理解し

たのは、ソクラテスの高弟プラトンであつた。プラトンは、その師ソクラテスが、真理は主観的であり且つ普遍的なものであると主張したのに対し、彼自身は、真理である「イデア」は、客観的であると主張したのであつた。

ヘラクレイトスは、真理を「ロゴス」という言葉であらわし、これをプラトンの的に理解して次のように言つてゐる。

「この理法（ロゴス）は、常に存在しているのであるが、人々はそれを聞くより以前も亦それを初めて聞いた時も、それを理解することは出来ない。……それ故に、普遍的なものに従うべき義務がある。この理法は、凡てのものに普遍的なものであるにも拘らず、大部分の人々は、各独自の判断力を有しているかの如く生活している」<sup>(4)</sup>

この説によると、真理であるロゴスは、「常に」存在するもの、即ち時間的に普遍なものであり、又同時に、「凡てのものに」普遍なもの、即ち空間的に普遍なものである。而も、ロゴスは、吾々の理解の如何にかかわらず、永遠に、普遍的に、客観的に存在するところのものである。普遍的な客観的な真理であるロゴスは、又吾々の判断の標準ともなるところのものであつて、吾々は、このような普遍的な客観的な真理に従つてものを判断しなければならぬ。そして、各人独自の主観的意見によつてものを判断しようとする独断をすてねばならない事を戒めている。

ヘラクレイトスは、宇宙の普遍的真理であるロゴスに対して、人が如何に無知蒙昧であるか、又如何に高慢無礼であるかを痛罵している。

「最善者が、凡てのものの中から選び取るべき一つのものがある。それは滅ぶべきものの中の永遠な榮譽である。多数者は勿論禽獸の如く満腹して臥しているのである」<sup>(5)</sup>。「道が何処へ通ずるかを忘れてゐる人を、人は想ひ出すに相違ない」<sup>(6)</sup>。

「彼等は、最も絶えず交際しなければならぬもの、即ち萬物の支配者たる理法と不和になつてゐる」<sup>(7)</sup>。  
叙智に目覺めたもののみ、永遠にして普遍的な真理の所有者である。愚者即ち「眠つてゐる」者は、独断的判断の

世界に満足している。

「覚めている人は、一つの普遍的世界を所有している。然し眠っている人は、各人独自の世界に位置を変える」<sup>(8)</sup>。  
この問題、即ち、ものを普遍的真理に照らして判断する普遍的判断と、独断的判断による相対的判断との問題は、将来前者の立場を採るソクラテスと、後者の立場を主張するソフィストの論争となつたところのものである。そしてロゴス即ち普遍的真理の問題は、ソクラテスの「普遍的概念」の思想を暗示している。

ヘラクレイトスの普遍的真理の思想は、叙上の意味の外、幾多の發展的思惟に導かれるのであるが、その一つは、この思想が一種の象徴主義に發展していることである。彼の言うところに依れば、永遠であつて普遍的な真理を認識することは、万物は一であることを認識する事である。彼は言う、

「私を認識するのではなくて、私の理法を認識し、凡てのものは一である事を理解することは賢明な事である」<sup>(9)</sup>。

この思想は、東洋思想を加味している新プラトン主義 (Neo-Platonism) の象徴主義 (Symbolism) を表明している。実に、個物は、全体であつて一つである實在の部分であり、一つである實在は、個物の相に於て此の世界に表象されているのである。而して、この永遠な一つである世界の本質即ちロゴスの本質は「火」である。彼は言う、

「凡ての實在に対して同一なこの自然の理法は、神も人も創造したものではなく、夫れは既に過去に存在し、現在存在しつつあり、又将来存在するであろうところの永遠に生きている火である。この火は、一定の度に従つて燃え、一定の度に従つて消えるところのものである」<sup>(10)</sup>。

このように、火がヘラクレイトス哲学の基礎原理であり、且つ普遍的であり一つである實在即ちロゴスの本質である。宇宙を構成する本質は何であるかという問題を具体的に討究していた宇宙論者の雰囲気<sup>(11)</sup>に育つたヘラクレイトスは、宇宙の根源的原理を、抽象的原理であるロゴスと云う言葉だけで満足する事が出来ず、「火」という具体的言葉で表明しないではいられなかつたのである。

更に、「この自然の理法は、神も人も創造したものではなく、夫れは既に過去に存在し、現在存在しつつあり、又将来存在するであろうところの永遠に生きている火である」という思想には、この普遍的真理であるロゴスが、経験的な原理ではなく先験的ア・プリオリな原理である事を明示している。

普遍的事実を認識する思惟の傾向は、認識論的には常に主知主義 (Rationalism) の立場となる。これ、普遍的真理の認識は、理性的反省若くは洞察に基くからである。ヘラクレイトスの思想には、この主知主義の一面が現われている。

「有りと有ゆるものを支配することを知つているところの理性を認識する人にこそ智慧が存するのである」<sup>(11)</sup>。

「私を認識するのではなくて私の理法を認識し、凡てのものは一つである事を理解することは賢明な事である」<sup>(12)</sup>。

かように、理性の声を聞き、之に従つて思索し、行為し、且つ普遍者を認識する者は真の智者である。この思想傾向は、ヘラクレイトスをして、いきほい主知主義の敵である感覚論 (Sensualism) の主張者を愚者とし、甚だしい場合は禽獸に等しいものであるとさえ痛罵したのであつた。愚者は、ものの真相を認識する事が出来ず、只感覚的事実をものの真相であると誤認するのである。彼は言う、

「太陽は、人間の足の幅の広さである」<sup>(13)</sup>。

感覚に捕われている人は、太陽を見ても、それが巨大な天体である事を認識する事が出来ず、ありのままの感覚をその真相であると思ひ、太陽を足の幅の大きさに過ぎないと信するのである。かように、愚者は、真理を眼前に見せつけられても、夫れが真理である事を認識する事が出来ないのである。

「驢馬は、黄金よりも寧ろ切葉を選び好むであらう」<sup>(14)</sup>。

「愚鈍な人は、全ての理法によつて呆然たらしめられるのを常とする」<sup>(15)</sup>。

その当然の結果として、愚者は、人生の行くべき道を知らない。

「道が何処へ通じているかを忘れている人を、人は想い出すに相違ない」<sup>(16)</sup>。

このように、人々が感覚に捕われていること、従つて、真理に疎く、人生の眞の行路を知らない事は、凡て彼等が宇宙の理法と隔絶しているがためである。

「彼等は、最も絶えず交際しなければならないもの、即ち万物の支配者である理法と不和になつてゐる」<sup>(17)</sup>。

そして、かような愚者には、当然受くべき運命が備えられている。即ち、彼等は、試練の場に追いやられて、神の鞭を受けねばならない。

「匍匐する凡てのものは、神の鞭をもつて牧場に遂放せられる」<sup>(18)</sup>。匍匐する畜生に等しい愚人の当然受けるべき運命を指摘し、宇宙の理法を衣として身にまとい、真人の生活に覺醒すべき事を教説するところに、ヘラクレイトスが、一方に於てはギリシヤの賢人、他方に於てはヘブライ的予言者の風格を現わしている点がある。

然らば、かくも尊い普遍的真理即ちロゴスは、どうすれば発見されるのであるか。どうすれば、これに達し得られるのであるか。ヘラクレイトスは、このロゴスに達する道を自己反省若くは自己認識に求めている。彼は、この自己認識について、次のように言つてゐる。

「凡ての人間には、自己を知る聰明さが与えられている」<sup>(19)</sup>。

「私は、私自身を探し求めている」<sup>(20)</sup>。

これらの言葉は、ソクラテスの金言であつて、デルファイのアポロ神殿の宣託であつた「汝自身を知れ」と相交う思想である。ソクラテスに先立つこと百年、ヘラクレイトスは、アポロ神殿に詣で、親しく「汝自身を知れ」という神託を受け、自己の精神生活を洞察したものと思われる。而も、ヘラクレイトスの自己認識の思想には、自己若くは靈魂の有機的発展の思想が存している。彼は言う、

「靈魂は、自己を増大する所の理法である」<sup>(21)</sup>。人が、自己を知る聰明さを發揮すればする程、自己は増大して行く

のである。自己を増大するという事は、取りも直さず、ロゴスに接近して行く事を意味している。これ実に、

「人間の特性は、ダイモニオン（神性）である」<sup>(22)</sup>

からである。かように、人は高く尊い性質を有している。この高く尊い人間の特性は、自己の空虚を意識し乍ら自己に深まり行く時に、より強くより高くなつて行くのである。この意味を次の如く言っている。

「乾いた光輝は、最知最善の靈魂である」<sup>(23)</sup>。

実に、自己の空虚、即ち乾いた靈魂を経験する事は、やがて最知最善の靈魂即ちロゴスに近ずいて行く事を意味している。この点に於て、ヘラクレイトスの思想は、

「このころの食しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」<sup>(24)</sup>  
というキリストの教に通うている。

ヘラクレイトスの普遍的真理即ちロゴスに関する理論は、上述のように、自己認識の思想とつながっているのであるが、それは又、弁証法的理論に導かれる。人間の性質は、高い尊いロゴスにつながっている。然し、この高い尊いロゴスは、自己が食しい乾いた精神を持たなければ、自己認識となつて表象されて来ない。ここに既に、彼の弁証法的理論が現われている。食しい乾いた心を求める事は、豊満充実した真理を得る道であり、自己の愚を自覚する事は、高い普遍的真理に達する事である。一般に、ヘラクレイトスの思想に於ては、相矛盾する二律は互に綜合統一される。これが流転する世界の特性である。世界の統一者自体が、かような二律背反的性質を帯びている。

「一者は、如何にして自己を分離しつつ合一するものであるかを人々は理解しない。即ち、調和は弓や七絃琴の如く、離れようとして反り合つているところにある」<sup>(25)</sup>。

この思想は、紀元後三世紀の中葉に現われたプロティノスの流出論<sup>(26)</sup>（Emanation Theory）即ち、人間の理性を超越している一者が、自己の性質から必然に万物を流出し、而も自己を分離するのではなく、又自己を減滅するので



もなくして、宇宙の統一を保つという流出論的思想の先驅をしているものという事が出来る。

この思想は、宇宙の本質である「火」<sup>フュル</sup>に関するヘラクレイトスの説明によく表現されている。ヘラクレイトスは「火」がその本性として「欠乏と充溢」の矛盾律を含んでいるものと考へた。

「彼（ヘラクレイトス）は、それ（ロゴス）を、欠乏と充溢と呼んだ。彼に従えば、欠乏は世界の形成であり、之に反して充溢は世界の燃焼である」<sup>(27)</sup>。

この思想は、余りにも深い実践的乃至は宗教的体験を語るところのものである。この世界の現状は、真の人間性に欠乏し、力に欠乏し、神の恩寵に欠乏している。人間が、真の人間性を得、力に充ち、神の恩寵に浴する為めには、人間は神の聖火に焼につくされねばならない。この思想も亦、バイブルの「神は焼きつくす火である」<sup>(28)</sup>という思想と相交うている。

「火」に焼きつくされる事は、理論的には、宇宙の真相即ち普遍的真理を認識し得るような真認識に達する事であり、宗教的には神の恩寵に浴して光榮ある生活を営む事である。この弁証法的推理は、更に、ヘラクレイトスの有名な言葉、

「向上道と向下道とは同一である」<sup>(29)</sup>。

によつて、異つた形式で表現されている。「向上道」とは、「火から発生する事」、「向下道」とは、「火に帰えり行く事」を意味するから、火から発生する事と、火に帰えり行く事とは、火から火への一環的連鎖をなす事であつて、この意味に於て両者は一致する。ロゴスから出てロゴスに帰える事は、同じロゴスの相であり、神から出て神に帰える事は、同じ神の相である。

火若くは神の属性自体に矛盾律が存しているというヘラクレイトスの思想には、更に次のようなものがある。

「神は昼と夜、冬と夏、戦争と平和、飽満と飢餓とである」<sup>(30)</sup>。

ヘラクレイトスのこの思想は、一方に於ては、彼の發展的、流轉的宇宙觀を表わすところのものであり、他方に於ては、綜合的、統一的宇宙觀を表わすところのものである。この思想傾向は、更に次のようにも表現されている。

「生と死、覺醒と睡眠、若年と老年とは、常に吾々の中に存する同一なものである」<sup>(31)</sup>。

「病氣は健康を、惡は善を、飢餓は飽滿を、勞苦は休息を快ならしめる」<sup>(32)</sup>。

「寒冷は温暖となり、温暖は寒冷となり、濕潤は乾燥し、乾燥は濕潤となる」<sup>(33)</sup>。

かような自然の相、流轉の法を認識する事が、眞の宇宙を認識する事である。宇宙は、元來「火」が流轉する相であつて、美しいものである。然し、一般人は、宇宙に関する眞の認識をなし得ないために、美しい宇宙も彼等には穢土に等しいのである。彼は曰う、

「最も美しい世界秩序（理法）も、無暗に堆積された塵埃の山のようなものである」<sup>(34)</sup>。

この象徴的、比喩的表現は、又道德的にも眞である。

「善と惡とは一つである」<sup>(35)</sup>。

これ、人間を陶冶改善する為めには、普通人が苦痛と考えること、或は不利益と考える事でも敢えて強制しなければならぬからである。例えば、医者が病人の治療をなすこと（善）と、病人に苦痛を与える（惡）療法をなすこととは同一であるようなものである。

かように、矛盾の綜合、弁証法的發展は、宇宙の真相である。これを認識することが、人間の最高最大の智であり徳であり、終局の目的である。眞の自己に対して、「自己ならざるもの」の存在を認識し、「この自己ならざるもの」と合一する筈が向上すればする程、人はより多く賢人となり、自由人となり、道德人となり、神に近い者となる。自己の中に我と非我との矛盾の対立を認識し、自己が分離して相闘う状態は、自己が自らを統一しようとする状態である。宇宙が矛盾する二律に分離して相闘う状態は、宇宙がロゴスに依つて統一されようとする状態である。

このような状態に於てのみ、宇宙の統一調和がある。

「戦は、万物の父であり、万物の王である。戦は一を神となし他を人間となし、一を奴隷となし他を自由人とする」<sup>(36)</sup>。

「戦は、普遍的であり、争は正義であること、而して、凡てのものは争と必然とに依つて生命を得ることを、人は知らねばならない」<sup>(37)</sup>。

かように、戦（二律の相剋）は、発展的宇宙の根源であつて、万物も、その現象も、亦価値ある生活も皆戦から生ずるのである。

弁証法的発展の真理は、個人の性質についても同様に言う事が出来る。即ち、死すべき人間は永遠な生命を有し、不死な存在に転生する可能性を有している。

「不死なるものは死すべきものであり、死すべきものは不死なるものである。両者は、相互に他の死に生き、他の生に死す」<sup>(38)</sup>。

「吾々は、靈魂の死に生き、靈魂は吾々の死に生きる」<sup>(39)</sup>。

これ、生と死とは、一である靈魂の両面であり、一つである靈魂が表現を異にしている状態であるからである。実に、生と死とは、人間の無限な発展の二つの段階に過ぎない。

かように、万物は、絶えざる発展及び流転の運命を負うている。今の我は、一瞬前の我ではない。一瞬後の我は、今の我ではない。

「吾々は、同一の河を渡つても、而も吾々は、同一の河を渡るのではない。吾々は同じ元の吾々ではない」<sup>(40)</sup>。何故ならば、

「同じ河を渡るものには、異なる水が流れて来る」<sup>(41)</sup>からである。

この思想は、更に彼の不朽な名言によつて次の如く述べられている。

「人は、同じ河を二度渡る事は出来ない。そして、同一の消滅する实体には、その性質上二度接触する事は出来ないのである。何故ならば、かかる实体は、その変化の烈さと迅速さによつて、分散して再び集合し、結合しては分離するからである」<sup>42</sup>。

要するに、ヘルクレイトスの思想は、真と偽、善と悪、美と醜、聖と穢、全体と部分、調和と不調和等の二元的矛盾に出発し、その究極に於ては、火の一元に帰一する。矛盾に満つる世界は、火によつて統一される一なる世界である。これ、火が自ら差別的に自らを分離して流転し、そして終には又自らに帰る不斷の運動をなす事を意味している。火が自ら多くの相に分裂し、又自己に帰える運動自体、大きな争闘である。かように、火自ら争闘する事が、万物存在の原因となるのである。

「分離しようとする努力は結合し、異つた音調から最も美しい調和が生じ、万物は争から生ずる」<sup>43</sup>。

という思想は、全く叙上の思想を伝えている。又曰く、  
「全体と部分、和合と不和、調和と不調和とは結合している。そして一は凡てのものより生じ、凡てのものは一より生じたのである」<sup>44</sup>。

かくの如く、ヘルクレイトスに取つては一なるもの、即ち火の自己争闘が万物の存在の源因であり、又かような矛盾の争闘的存在形式が宇宙万物の普遍的真理であり、これを主観的に認識する事が普遍的真理即ちロゴスを真に認識する事である。

### 三、ソクラテスの思想に於ける普遍性

紀元前四百八十年、ペルシヤ戦争が終局をつげ、ギリシヤが決定的勝利を博するに及んで、アテネに於て東西両洋

の文化が融合してコスモポリタン生活が出現するにつれて、西洋文化史上に族ける最初の文芸復興が起つた。この文芸復興の宣伝者には文学者にユーリピデス (Euripides, 480—406 B. C.) 政治家にペリクレス (Pericles, 429 死) 哲学者にソフィスト (Sophists) の群がいた。ソクラテスの思想を理解するためには、ユーリピデスとペリクレスの思想はさておき、ソフィストの思想を先ず理解しなければならぬ。

ソフィストの代表的学者は「プロタゴラス (Protagoras, 481—411 B.C.) である。彼は、所謂「詭弁論者」(Sophists) の代表者ではあるが、文典に於ける「品詞」(Parts of speech)、「時」(Times)、「法」(Moods) 等を区分した最初の学者としても記憶されている。然し、文典学者としてよりも、詭弁論的哲学者、相對論的哲学者、感覺論的認識論者として、より多く有名である。プロタゴラスによれば、吾々各自が相對的に、感覺的に認識する現象のみが、そのものの真相である。いわば、ものについて、自分が感覺したままが、そのものの真相であるというのである。この意味に於て、ものの真相は、各自の主觀的感覚若くは意見によつて決定されるのであるから、認識論的には、彼の思想は、相對論であり、感覺論である。この点について彼自ら次のように言つてゐる。

「ものは、諸君には、それが諸君に現われるままのものであり、わたしにはそれがわたしに現われるままのものである。そして、……諸君もわたしも人間である」<sup>(46)</sup>。

ここに、次のプロタゴラスの金言が成立するのである。

「人は万物の尺度である。有る事については有るといふことの、有らざる事については有らずといふことの」<sup>(47)</sup>。

この立言に於て「人」といふのは、各自の意見若くは感覺を意味するのであつて、つまりこの立言の意味は、各自の意見若くは感覺が、ものの真偽、善悪、正邪、美醜を判断する標準になるというのである。そして、ものを認識し判断する唯一の機能は、実に感覺である事を、彼は念を押すように次の如く主張している。

「感覺は、常に實在に關係する。そして感覺が存する時に知識も亦真となる」<sup>(48)</sup>。

この意味に於て、ソフィストは、後世に於ける感覺論 (Sensationism) の先驅者となつた。ソフィストの詭弁論的、相對論的、感覺論的思想は、やがて二大人物によつて論駁せられる運命にあつた。アリストファネスとソクラテスとである。アリストファネス (Aristophanes, 446?—385 B. C.) は、文學的諷刺によつて、ソフィストの詭弁論が、直接に社会に害毒を流す空理空論である事を指摘した。<sup>(8)</sup>

ソクラテス (Socrates, 469—399 B. C.) は、元來ソフィストの雰囲氣の中で教養され乍ら、而もソフィストの領域を脱して独自の哲學的地位を築き上げた學者であつた。即ち、ソクラテスは、ソフィストの相對論の雰囲氣の中で教養されたのであつたが、尚よくその相對論の真理を普遍的真理に改変したのであつた。ソフィストの學的傳統の中で育つたソクラテスは、次の三点に於て、ソフィストとの思想上の關連をもっている。

第一、兩者共に、批判的精神をもつて哲學的思索を展開した。ソクラテスは、ソフィストのように、批判的精神を哲學研究の信条となし、伝統的思想、制度、風習等に対して、鋭い批判を浴せたのである。彼は、所謂「産婆術」 (Maieutic) と呼ばれる對話法即ち問答によつて、漠然とした不確実な概念を、明瞭な確実な概念へと導く方法によつて、當時の社会を啓蒙したのである。人間性に関する批判的研究の結果生じたソクラテスの確信である「知識は徳である」 (Knowledge is virtue) は、既にプロタゴラスが発言していた思想であつた。又「人は万物の尺度である」と云うプロタゴラスの思想は、形式的には、ソクラテスが承認しているところのものである。

第二、兩者は、共に自然科学を否定する。ソクラテスは、ソフィストと同様に、自然科学は、道德的「アレテ」 (技能) に関係しない學であるから無価値であると主張した。ソクラテスによれば、知識は、常に自然を対象とする説明的分析的知識を意味しないで、自己を内観して自己を知る事である。「自己を知る」とは、自己の内に存在する普遍的人間性即ち「概念」 (Concepts) を認識することであり、この認識はやがて社会一般に実利を与える行為となつて実現されるところのものである。この意味に於て、ソクラテスは、ソフィストと共に自然科学に対する懷疑論者

であつた。

第三、人間性に関する思想に於て、ソクラテスは、ソフィストの立場から出発して、遂にソフィストの思想領域から脱出した。ソクラテスは、ソフィストの普遍的真理に対する懷疑論的結論に反対して、真理の普遍性及び絶対的知識の可能性が存する事を主張した。真理の標準は、各個人の中に存するという点に於て、ソクラテスとソフィストとは、形式的には一致する。然し、ソフィストは、各個人がその独断的相対的感覚若くは意見によつて判断した事に真理性がある事、従つて各個人の判断する真理は夫れ夫れ異つてゐる事を主張する事によつて、普遍的真理を否定した。之に反して、ソクラテスは、このような相対的真理は矛盾して居り、且つ皮相的なものとなし、かような相対的矛盾を離れ、これを越えた真理が存在する事を説き、この真理は人間が等しく追求しなければならない理想として、万人の中に人間性として普遍的に存在するものであることを結論した。この意味に於て、「人は万物の尺度である」というプロタゴラスの説に於て、プロタゴラスは、「人」を「各個人」若くは「各個人の独断的意見」と解し、ソクラテスは、之を「人間性」若くは「普遍性を持つ人間」であると解した。「知識は徳である」という説に於て、プロタゴラスは、「知識」を解して「各個人の感覚若くは意見」となし、ソクラテスは、之を「凡ゆる人間経験を綜合し得る人間性の普遍的認識」であると理解した。従つて、プロタゴラスに取つては、各個人の相対的独断的感覚や意見がものを判断する尺度となり、ソクラテスに取つては、普遍的人間性がものを判断する標準となるのである。更に、プロタゴラスに取つては、相対的独断的感覚や意見を自由に驅使して相対的な独断的な結論を与えるような人物が徳ある人物であり、ソクラテスに取つては、人間に内在する普遍性を認識し、之に照らしてものを判断するような人物が真に徳ある人物であるのである。

かように、プロタゴラスは、複雑多様な各個人の感覚や意見と、それに依る判断を尊重しソクラテスは、複雑多様な個人の感覚や意見の根底に存するところの各個人に普遍妥当する人間性即ち概念と、之を標準とする普遍的判断に

意義を見出したのである。ソクラテスによれば、吾々は、複雑多様な感覚や意見が存在する事は、ソフィストと共に認めなければならない。然し、これらの感覚や意見は、普遍的判断若くは普遍的概念に従属しているところのものである。この普遍的概念こそ、万人が認めなければならない真理であり、又従つて、ものを判断する尺度となるところのものである。これが、普遍性若くは普遍的概念に関するソクラテスの真意である。

ソクラテスが提唱する普遍的概念は、唯一究極の實在とか、第一原因者というような實在を意味するのではない。彼のいう普遍的概念は、多元的であつて、一つの意見には必ずそれに抛らなければならない規準となる意見があり、一つの知識には、その標準となるべき根源的な普遍的な知識があり、一つの概念には、その型式となるべき普遍的観念があり、一つの行為には、その規範となるべき高い行為があるという意味に於て、それらの規準といい、標準といい、型式といい、規範というべきものを各々「アレテ」(徳若くは技能)若くは「概念」と呼んだのである。この「概念」は、あくまでも内的な主観的原理である。この意味に於て、ソクラテスの思想は、客観的原理の存在にまでは未だ発展しなかつた。これを客観的原理に発展させたのは、ソクラテスの高弟プラトンであつたが、ここにはその説明を割愛する。

概念の所在について、クセノフォン(Xenophon, 400頃 B. C.)の「ソクラテスの回想録」に於て、概念がもの自体に存する事を次のように説明している。

「凡てのものは、そのもの自体について善であり美である事を諸君は知らないか。例えば、徳は或る他のものについて善であり美であるのではない。同様に、人はその人自体について美と呼ばれ善と言われる。人体も亦その人体自体について善や美をあらわす。かように、人の用ゆる凡ゆるものは夫れ等がその人のために役立つ限りに於て善であり美であると考えられる」<sup>(48)</sup>。

これは、クセノフォンがソクラテスの概念論を説明した言葉であるが、概念がもの自体に存するという意味に於



て、ソクラテスの本来の主張であるところの概念は自己の中（認識主観）にあると云う主張と矛盾している。然し、ソクラテスの本来の主観的概念論とクセノフオンのソクラテス理解による客観的概念論は、次のように表現するのが当つていと思われる。即ち、ものの本質がもの自体に存在する事は、一般に認められるところであるが、ソクラテスは、自己の中に内在的に、ものを真のものとして認識する知力即ち概念が存在する事を主張したのである。ソクラテスは、その本来の思想に於ては、ものの認識の形式即ち如何にものを認識すべきかという事に力説点を置いたのではなくて、万人の心の奥底には、万人に共通な概念即ちものを判断する原理が存在すると云う事を強調したのである。この原理、この概念を確認する事が、人間の目的であり、真理探究の到達地である。

#### 註

- (1) Kant : Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, II Abs., 50.
- (2) Ibid., II Abs., 53.
- (3) これらの断片は、次の諸書に集録されている。  
Hermann Diels : Die Fragmente der Vorsokratiker I, 1922  
Arthur : Fairbanks : The First Philosophers of Greece, 1898  
Charles M. Bakewell : Source Book in Ancient Philosophy, 1907  
波多野通敏訳「ヘラクレイトス、附ヘーゲル及びツェラーの解釈」  
Frag. 1—2
- (4) Frag. 29
- (5) Frag. 71
- (6) Frag. 72

- (8) Frag. 89  
 (9) Frag. 50  
 (10) Frag. 30  
 (11) Frag. 41  
 (12) 註 (6)  
 (13) Frag. 3  
 (14) Frag. 9  
 (15) Frag. 87  
 (16) Frag. 71  
 (17) 註 (6)  
 (18) Frag. 11  
 (19) Frag. 116  
 (20) Frag. 101  
 (21) Frag. 115  
 (22) Frag. 119  
 (23) Frag. 118  
 (24) 「ト々々々々々々々々々々」  
 (25) Frag. 51  
 (26) Plotinos (204 - 269 A. D.) : Fifty Five Corpuscles=Six Enneads 以恩德のたゞしき  
 (27) Frag. 65

28 「クニマ入の手紙」 一二三九

29 Frag. 60

30 Frag. 67

31 Frag. 88

32 Frag. 111

33 Frag. 126

34 Frag. 124

35 Frag. 58

36 Frag. 53

37 Fraa. 80

38 Frag. 62

39 Frag. 77

40 Frag. 49

41 Frag. 12

42 Frag. 91

43 Frag. 8

44 Frag. 10

45 C. M. Bakewell ; Source Book in Ancient Philosophy, P. 78

46 Diogenes Laertius ; Lives of Eminent Philosophers, Bk. IX, 51

47 Bakewell ; Source Book, P. 79

- (48) アリストファネスには、喜劇詩十一篇があるが、特にソフィストを諷刺したのは「雲」と云う詩である。
- (49) Xenophon: Memorabilia of Socrates, III, 85

Genpei, Ninomiya

## The Discovery of Universality and Its Theory

### Résumé

In the logical thinking, the moral judgment, the aesthetic appreciation and the religious experience, it is the universal truth or universality that we have to know as the criteria of these mental activities. That is, we demand a certain universal standard, when we try to judge truth or falsehood of logical thinking, right or wrong of moral conduct, beauty or ugliness of aesthetic production, and righteousness or unrighteousness of religious experience.

In Greek philosophy, we find the theory of universality or universal truth in the thoughts of Herakleitos (c. 535—c. 475 B.C.) and Sokrates (469—399B.C.). Herakleitos called the universal truth “Logos” and Sokrates “the Universal Concepts” which later Platon called “Ideas.”

This thesis argues the processes and theories of Logos and the Universal Concepts proposed respectively by Herakleitos and Sokrates.